

社会的移動
— 6大都市での調査 —

西平重喜

(1953年7月 受付)

Social Mobility

— A Sample Survey in the Six Large Cities —

Sigeki NISHIHARA

§1. Preface: The International Sociological Association determined a Programme of Cross-National Research on Social Stratification and Mobility. The Japan Sociological Society undertook the programme and we, Taga Y., and me, cooperated with the Society at his request. We will report here, occupational mobility only. The details of the research was printed in English and in Japanese (cf. the end of the Japanese report).

§2. Survey technique:

Population: The males (20~69 years old) who resident in the six large cities of Japan.

Sampling: Stratified random sampling and proportional allocation, sample size 899.

Method: Interviewing by students of Universities.

§3. Occupational mobility of the individual's lifetime.: We find out on the each occupation, 1) years of experience in present occupation, 2) occupation at ages groups of the sample, 3) initial occupation by sample's present ages groups, 4) identify of initial and present occupation, 5) career pattern. Then we concluded that the rank of stability of occupation among persons beginning work as professional is the first, and the 2nd is managerial, the 3rd is industrial, the 4th is clerical and agrarian and the 6th is merchandiser.

§4 Occupational mobility across the generations: We find out on the each (sample's) occupation, 1) identify of sample's initial or present occupation and his father's 2) "inheritance" of occupation and adopt, 3) sample's, father's, wife's father's and grandfather's occupation, 4) identify of grandfather's occupation and father's, father's and sample's, and among three generations, and 5) identify of sample's occupation and his son's—sons presently engaged in and wishes sons to engage.

The '1), 2) etc. of each §' correspond with the Japanese report. Then you can read the each tables as follows: The 1st column is professional and technical, the 2nd is managers and officials, the 3rd is clerical workers, the 4th is merchandisers, the 5th is agrarian, the 6th is mining and quarrymen, the 7th is transportation workers, the 8th is craftsmen and industrial workers, the 9th is general laborers, the 10th is service workers, 11th is no occupation and 12th is total, in the tables 2-2, and 4-3. In the tables 3-2, 3-5, 3-6, 4-5 and 4-6 we miss the 11th column, in the tables 4-1, 4-2 and 4-4 miss the 6th, 7th, 9th, 10th and 11th columns, in the tables 3-7, 3-8 and

3.9 moreover misse 12th column, in table 3.4 we add other occupation before total.
Italic number is %.

Institute of Statistical Mathematics

§1 ま え が き

社会学の問題の一つとして、社会的移動 (social mobility)¹⁾ ということがある。たとえば個人の生活歴の中とか、あるいは世代にわたって起った、社会的地位 (social status)、職業、学歴などの変化は、社会的移動と考えられる。このような問題について極めて特別な家 (系)、集団、階級などの研究はいくつもなされている。しかし一般国民の間では、どんな社会的移動がおこなわれているかということは、ほとんど知られていない。このような一般国民についての社会的移動の実態がつかめれば、社会心理学的な諸問題——たとえば、葛藤 (conflict)、緊張 (tention)、階級 (class)、小数派 (minority) など——の解決にふみ出すことができるであろう。

われわれはあとがきでのべるように、この問題についての研究を、昨 (1952) 年におこなった。ここでは社会的移動のうち、個人と世代にわたっての職業の変遷をのべる。

なおイタリック数字は%をあらわす。

§2 調査の方法

調査は予算のつごうで、6 大都市の数えオ 20~69 才の男子を対象とし、ランダム・サンプルに対して面接調査でおこなった。調査員には各大学の社会学科の学生があたった。各都市別のサンプル数は第 2.1 表のとおりである。市によっては回収率が低かったり、国勢調査の結果と多少のくいちがいがみとめられるところもあるが、以下でのべる点には大きなゆがみはないと思われる。そこで回収されたサンプルについて分析をすすめてゆく。

第 2.1 表 サンプル数

	東京	横浜	名古屋	京都	大阪	神戸	合計
人口(1000人)	5385	951	1031	1106	1956	805	11234
サンプル数	438	84	88	91	148	50	899

また、職業分類というのは、国勢調査の大分類と同じ専門、管理、事務、販売、農業、鉱業、運輸、職人・工具、単純労働、サービス、無業をさし、その分布はつぎのとおりである。

第 2.2 表 職業分類

職業	専門	管理	事務	販売	農業	鉱業	運輸	職人・ 工具	単 労	サー ビス	無業	合計
人	73	165	140	72	19	0	33	242	35	36	84	899
%	8.1	18.4	15.6	8.0	2.1	—	3.7	26.9	3.9	4.0	9.3	100.0

§3 個人の職業移動

1) 勤続年数 現在の職業についてから何年になるかをもって、勤続年数とよぶことにする。

第 3.1 表 勤続年数

勤続年数	1	2	3, 4	5~9	10~14	15~	小	計*
就職時期	1952	1951	1949 1950	1944~ 1948	1939~ 1943	1938 以前	(%)	(人)
%	11.4	12.1	16.1	32.4	7.1	20.9	100.0	813
一年当り%	11.4	12.1	8.1	6.5	1.4	?	—	—

(* 無業、失業、不明の 86 人をのぞく)

すなわち2年のものが一番多い。累積をとってみれば、5年以上のものが約60%、10年以上が約1/4になり、15年以上は約1/5ある。

つぎに職業別の平均勤続年数を計算してみる。

第3・2表 勤続年数

	専門	管理	事務	販売	農業	鉱業	運輸	職人・ 工員	単純 労働	サー ビス	小計
\bar{x}	7.5	8.9	7.0	5.8	11.8	—	6.0	7.8	7.1	6.4	7.6
σ	5.4	6.1	5.0	4.5	5.9	—	4.4	5.8	5.4	6.1	5.6

すなわち、農業は約12年で一番長く、管理が約9年で長い。他の職業は有意差はなく6~7年である。

2) 時期による職業 ここで時期というのは、ある一定の年令のときに、どんな職業についていたかということであって、時代によるものではない (cf. 第3・4表)。すなわち、始めの職業、30才の(ときの)職業、40才の(ときの)職業、55才の(ときの)職業、現在の職業の分布はつぎのとおりである。但し年令は数え年である。

第3・3表 時期による職業

職 業	専門	管理	事務	販売	農業	鉱業	運輸	職人・ 工員	単純 労働	サー ビス	無業	合 計
始 め	9.5	5.7	19.3	11.0	7.0	0.2	2.6	37.0	1.7	3.1	2.9	100.0 % 892人
30 才	7.9	20.8	16.9	6.2	3.8	0.0	3.6	31.3	2.4	5.2	1.9	100.0 529
40 才	8.0	31.3	10.3	5.9	3.2	0.0	2.9	27.7	5.9	3.5	1.3	100.0 375
55 才	5.8	28.1	6.6	4.1	4.1	0.0	3.3	27.3	7.4	5.0	8.3	100.0 121
現 在	8.1	18.4	15.6	8.0	2.1	0.0	3.7	26.9	3.9	4.0	9.3	100.0 899

始めの職業以外は現在の職業によく似ている。始めの職業では事務や職人・工員が多く、管理が少ない。まだ職業別にみると専門はあまり差はないが、55才のときの方が始めより有意に少ない。管理は4)才のときは他の時期より有意に多く、始めは他の時期より有意に少ない。事務、販売、職人・工員はいずれも才をとるに従ってへってゆく。単純労働は逆にふえてゆく。農業は始めだけやや多い。運輸、サービスはほとんどかわらない。

3) 年令別の始めの職業 現在の年令別に始めの職業をみるということは、時代によって始めてつく職業にちがいがあつたかどうかをみることになる。年令を便宜上、20~34才(大正8年~昭和8年)、35~49才(明治37年~大正7年)、50~69才(明治17~36年)の三つにまとめた。

第3・4表 始めの職業

始めの職業	専門	管理	事務	販売	農業	職人・ 工員	その他	合 計
若年(20~34)	11.9	3.5	24.5	7.6	5.0	34.6	12.9	100.0 397
壮年(35~49)	7.6	5.6	14.9	15.5	5.6	41.9	8.9	100.0 303
老年(50~69)	7.5	10.1	14.6	10.6	12.5	33.2	11.5	100.0 199

すなわち専門や事務を始めの職業とした若年のものは他の年層より多く、職人・工員、販売は壮年が、管理、農業は老年に多い。これは時代の差を示すものとしておもしろい。

4) 始めの職業と現在の職業 職業の間の親近性をきめることはむずかしいから、始めの職業と(職業大分類が)同じ職業のものをしらべる。

第4.1表 始めと現在の職業の一致

職業	専門	管理	事務	販売	農業	鉱業	運輸	職人・ 工人	単勞	サー ビス	小計
現在から	80.9	20.6	62.1	38.9	73.6	—	36.4	76.5	19.5	28.4	54.2
始めから	69.4	66.6	54.6	31.8	22.7	—	52.2	56.0	46.8	32.2	51.0

現在の職業からみると、始めの職業が同じだったものは全体で 54% ある。特に多いのは専門、職人・工員、農業、事務などである。

逆に始めの職業からみて、現在も同じ職業のものは、全体で約半分で、専門、管理、職人・工員事務が多い。

すなわち、専門、事務、職人・工員などは、余り途中でかわらない職業であり、管理はあとからなったものが多く、農業はあとから他の職業にかわったものが多い。

5) 職歴 われわれの興味ある問題として、career pattern がある。しかし 4) でみた始めの職業と現在の職業でさえサンプル数が少なく信頼度がうすくなつてしまう。そこで始めの職業をもとにして、少なくとも 30 才まで同じ職業をつづけていたもの、更につづけて少なくとも 40 才、55 才、現在（但し 56~69 才のもの）まで同じ職業をつづけていたものの割合をみよう。

第3.6表 職 歴

始めの職業		専門	管理	事務	販売	農業	鉱業	運輸	職人・ 工員	単純 労働	サー ビス	小計
実 数 (人)	サンプル総数	85	51	172	98	62	2	23	330	15	28	866
	内											
	30~69 才	52	45	104	77	46	0	14	212	11	22	583
	40~69 才	35	36	73	70	41		10	160	7	18	450
訳	55~69 才	19	19	58	63	39		8	105	6	16	333
%	少なくとも 35才まで同職	79	85	66	34	39	0	64	69	55	50	63
	40才まで同職	66	72	29	13	24		50	49	71	11	40
	55才まで同職	32	32	5	3	13		25	18	67	0	14
	現在も同職*	26	21	5	2	13		13	16	67		12

* 59~69 才のもののみ

この表は例えば始めの職業が専門の人は全部で 85 人あり、そのうち 30~69 才の人が 52 人、40~69 才が 35 人、...であり、その 30~69 才 (52 人中) の 79% が少なくとも 30 才まで専門、40~69 才 (35 人中) の 66% が少なくとも 40 才のときまで専門、...であることを示す。

また少なくとも 30 才まで同じ職業であるものの%を、30 才のときの同職率とよぶことにすれば、同職率の高い順に番号をつけると、つぎようになる。但しサンプル数の多い職業だけについて。

すなわち、同職率の順序はどの年令のときもほとんど同じであって、どの年令でも管理や専門は始めからその職業のものが多く、販売は少ない傾向がある。なお、専門や管理の同職率のへり方は傾斜のゆるい直線的であるが、販売、農業では 30 才までの間に半分以下にへってしまう。この同職率のへり方をも

う少しくわしくみるために、始めの職業を 20 才と仮定して、始めと同じ職業の者が 50% になる時期——半減期とよぶ——をみれば、つぎようになる。

第3.7表 同 職 率

始めの職業	専門	管理	事務	販売	農業	職・工
30才のとき	2	1	4	6	5	3
40才のとき	2	1	4	6	5	3
55才のとき	1.5	1.5	5	6	4	3

すなわち、同職率のへってゆく速さはこれからみても管理が一番おそく以下専門、職・工、事務、農業、販売の順である。

第 3・8 表 半 減 期

始めの職業	専門	管理	事務	販売	農業	職・工
半減期(年)	27	28	14	7	8	19
その年令(才)	47	48	34	27	28	39

6) 各職業の安定性 今まで見てきたものはいずれも、各職業の安定性をみるための、一つのインデックスと考えることができ。

いまサンプル数が少ない職業をのぞいて、各インデックスについて、安定性の高い——長い間それについている——職業の順位をつけてみる。

第 3・9 表 順 位

職 業	専門	管理	事務	販売	農業	職人・ 工員	備 考
勤務年数	4	2	5	6	1	3	長い順 (第 3・2 表)
同 職 率	2	1	4	6	5	3	多い順 (第 3・7 表)
半 減 期	2	1	4	6	5	3	長い順 (第 3・8 表)
始めの職業 と現在の職業 の一致率	1	2	4	5	6	3	始めからみて 多い順 (第 3・4 表)
	1	6	4	5	3	2	現在からみて 同じ順 (第 3・4 表)
平均順位	2.0	2.4	4.2	5.0	4.0	2.8	

この五つのインデックスについての順位的一致率 (coefficient of concordance) W を計算すると、

$$W = \frac{125}{m(n^2 - n)} = 0.433$$

また、 $\chi_w^2 = m(n - 1)W = 10.83$

$$P_r(\chi_w^2 > 14.0) > 0.05 \quad (D.F. = n - 1 = 5)$$

となり、この五つのインデックスの順位は一致しているとはいえない。しかし一応これらの五つのインデックスの順位のもつて、各職業の安定性と定義すると、専門が一番安定性の高い職業で、管理、職人・工員、事務及び農業、販売の順になる。

§4 世代にわたる職業移動

1) 本人の職業と父の職業 父の職業と本人の職業をくらべるとき、サンプル数が少ないので、単に同じ職業であるものだけをみる。ここでは、本人の職業としては、始めのものと現在のものと考えよう。

第 4・1 表 本人の職業と父の一致率

職 業	専 門	管 理	事 務	販 売	農 業	職 人・ 工 員	小 計*
始 め	25.9	58.5	15.1	7.1	83.9	26.7	26.4
現 在	27.4	44.2	16.4	5.6	94.7	26.4	25.4

(* 無業、不明をのぞいたすべてについて)

この表は、サンプルの始めの職業が専門であったもののうち 25.9% が、サンプルの現在の職業が専門のもの 27.4% が父も同じ専門であったことを示す。

すなわち、本人の職業を、始めにとっても現在にとっても有意な差はない。しかし職業別にみれば、農業は他の職業より有意に高い。これは 6 大都市で農業に従事しているものの父はほとんどや

はり農業だったことを示すので当然であろう。つぎの管理も他の職業より有意に高い。販売は他の職業より有意に少ない。すなわち、職業によって、一致率はまちまちである。上の表は職業大分類が一致している率であったが、小分類まで一致するものは、わずか 12.5% (=112 人/899 人) にすぎなかった。しかもこれも小分類で一致しているだけで、全く同じ職業とはいえない。

2) **あととり、養子** つぎには各サンプルに「あなたはあととりですか?」という質問をしたとき、「あととり」と答えたものと、「あなたは養子ですか?」に対して「養子」と答えたものを、職業別にみよう。

第 4・2 表 あととり、養子

職 業	専門	管理	事務	販売	農業	職人・ 工員	小計
あととり率	42	51	61	57	74	45	52.5
養子率	11	12	11	8	2	9	8.7
同職の あととり率	21	26	11	4	68	15	14

「あととり」は農業、事務、販売などが多い。養子は職業によつてほとんどかわりないが、農業は(6大都市では)少ない。

さらに本人の職業と父の職業が一致していて、しかも「あととり」といった者は、最終行にあげてあ

る。これについてみれば農業は断然多い。

全体についてみれば、「あととり」と答えたものは約 53% もあつたが、大分類の職業が同じものは 14% にすぎない。

3) **職業の世襲** 本人と父の間の職業の世襲を考えてみよう。全体についてみても、本人と父の職業が大分類で一致していて、且つ「あととり」というものは 14% であった。一方小分類まで職業が一致するものは 12.5% であったから、小分類まで一致する「あととり」は 12% 以下であろう。こうしてみると、親子2代の世襲率というものは 10% 前後ではないかと思われる。

なお養子はわずか 8.7% にすぎず、養子で養父と職業が一致するものはわずかに 2% にすぎないから、このいみでも職業の世襲ということは、(6大都市では)ほとんど問題にならないであろう。

4) **世代別の職業** 本人、父、妻の父、祖父の職業を比べると、職業の世代にわたる変遷がわかる。本人以外の職業は最盛期のものである。

第 4・3 表 世代別職業

職 業	専門	管理	事務	販売	農業	鉱業	運輸	職人・ 工員	単労	サー ビス	無業	合 %	計 人
本 人	8.1	18.4	15.6	8.0	2.1	—	3.7	26.9	3.9	4.0	9.3	100.0	899
父	6.3	29.8	7.6	3.5	27.6	0.6	2.0	16.5	1.8	2.4	1.9	100.0	884
妻の父	5.4	30.3	6.8	2.4	33.2	0.3	1.9	13.3	1.2	2.1	3.1	100.0	578
祖 父	4.7	22.7	1.7	1.1	56.2	0.1	0.1	6.1	0.1	5.1	2.1	100.0	749

すなわち、本人の父と妻の父はよく似ており、農業は妻の父の方が有意に多いが、他の職業では有意差はない。

本人の職業が農業であるものは少ないから、父や妻の父の農業率が高いことは、本人の代になって6大都市に出て来た者が多いことを意味しているだろう。

つぎに職業別に3代(本人、父、祖父)の差をみると、専門ではだんだんふえて来る傾向がある。管理は父の代が他より有意に多いことは、本人の職業が最盛期でないためであろう。事務や販売、職人・工員もだんだんふえているが、職業の性質から当然であろう。農業は祖父の代では 56% もあるが、これは世代のうつりということと、6大都市ということにもよるのであろう。

5) **世代間の職業の一致** つぎには3代にわたって、各世代間での職業の一致をみる。このサンプリングからは余り妥当ではないが、祖父から父へ、父から本人へと引きつがれた率を考えること

にする（但し、ひきつがれたといっても、大分類で一致していることである）。

第4.4表 世代間の職業の引きつぎ

職業	専門	管理	事務	販売	農業	職人・ 工員	小計
祖父→父	57.1	58.2	23.1	25.0	47.6	50.0	39.2
父→本人	35.7	27.8	34.3	12.9	7.4	43.8	23.1
祖父→父→本人	17	19	—	—	4	20	7.4
祖父←父←本人	8	20	—	—	95	4	7.4

まず祖父から父に引きつがれた率と、父から本人への引きつがれ率とをくらべると、専門、管理、農業では有意にへっている。

さらに3代の一致率を、祖父の方からみたときと、本人の方から見たときでは管理以外は大方よろすがちがい、とくに農業はいちぢるしい。すなわち、本人が農業であればほとんど父も祖父も農業であったが、祖父の代に農業であっても本人まで引きついだものはほとんどない。職人・工員はそれほどひどくはないが、これと逆の関係を示している。これらは6大都市の性格とこれらの職業との関係をよくあらわしている。

さらに3代つづいて同じ市内で、同じ職業をしていたものは、全体で4.3%にすぎない。但し農業の約80%は同じ場所でおこなわれていたから、おそらく3代にわたって世襲されたのであろう。すなわち、農業以外では3代にわたって世襲されたもの——地盤といういみで場所をも含めれば——4%以下である。

6) 子供の職業 子供の職業は、子供がないか、まだ働いていない者には希望を、働いているものには現実の職業をたずねた。

第4.5表 子供の職業

	専門	管理	事務	販売	農業	鉱業	運輸	職人・ 工員	単労	サー ビス	小 %	計 人
現 実	7.7	10.8	24.6	7.7	3.1	0	4.6	36.9	3.1	1.5	100.0	130
希 望	32.0	34.0	18.5	3.0	3.5	0	1.0	6.5	0	1.5	100.0	240

なお、現実には不明10人、希望では抽象的な答えのものが49人（約20%）あった。

現実についている子供の職業と、本人の職業（第2.2表）の間に有意な差はない。しかし希望する職業では専門や管理がふえて、職人・工員がへっている。

つぎに本人の職業と子供の職業が一致する率をみよう。

第4.6表 本人と子供の職業の一致

職業	専門	管理	事務	販売	農業	運輸	職人・ 工員	単労	サー ビス	小 %	計 人
現 実	17	31	45	14	100	25	61	14	0	32	42
希 望	75	55	25	7	83	0	14	0	20	33	65

サンプル数が少ないから検定はできないが、専門や管理は自分と同じ職業につけたいと希望するものが、現実についているものより多く、事務、職人・工員などではこれと逆になっている。

あ と が き

この研究は、国際社会学会（International Sociological Association）が、国際的比較研究のために計画し、日本社会学会がこれに参加したものである。日本社会学会から調査にあたって、われわれの研究所に

協力の依頼があったので、私と多賀保士が調査委員として、始めの計画から最後の報告を作るまでこれに従った。この結果は来る8月末に Liège の学会で尾高邦雄博士によって報告される。なおこの調査については、すでにつぎのような報告を発表した。

さらに社会的成層及び移動については、深い、廣い研究調査を計画中である。

1) Research Committee, Japan Sociological Society: Report of a Sample Survey of Social Stratification and Mobility in the Six Large Cities of Japan. (これは国際社会学会への報告で、尾高、西平、多賀が原稿を作った。)

2) 尾高、西平: わが国六大都市の社会的成層と移動 (社会学評論 12 号)

3) Nishihira, S.: On the Quantification of Social Status. (Annals of the Institute of Statistical Mathematics, Vol. V, No.1.)

(統計数理研究所)